令和４年　全国広報コンクール受賞・入選作品（神奈川県内）の概要

【　葉山町「広報葉山」（12 月号）】

【主たる記事の掲載意図】

「みんなちがってみんないい」という有名な詞の一節があるように、人との違いを理解してお互いを尊重する社会は理想的な形です。しかし実際の社会には多数派が優先される場面も多く、自分らしく生きづらいと感じている人がいます。少数派の中には、生きる上で何らかの障害がある人、目に見えづらい特性を持つ「発達障害」と診断された人などがいて、日々生きるのに様々な努力をしています。12 月号の特集記事では、人との違いを「らしさ」に変えて「自分らしく生きる」をテーマに、それを支える町の人や取組みについて紹介しました。本来人との違いは、自分にしかできない役割を見出すきっかけであり、とても素敵なことです。そのことを実感し、少しでも生きやすくなる行動をするために、チェックリストなどで自分を知ることを通じ、自分事として捉えながら、考えやすい内容にしました。

【講評（令和４年全国広報コンクール）】

自分らしく生きることの大切さを子どもに対してメッセージし、周囲の大人や自治体もその価値観を変えていこうという姿勢と取組がチャレンジングであり、新鮮だった。読者の考え方を変えるヒントを、多角的に取り上げているのもよい。取材で得たリアルな声から、他者への想像力、インクルーシブな教育への共感が広がる成果を得ている。

【 厚木市「広報あつぎ」（11 月 1 日号）】

【主たる記事の掲載意図】

感染症による非対面コミュニケーションの推奨やスマートフォン・SNS の普及などで、デジタル技術はますます私たちの生活に身近で不可欠なものになった。テーマは「デジタル化を考える　便利さは何のため」とし、デジタル技術との付き合い方を考える特集とした。さまざまな立場の市民の姿を見つめることで、便利に変わっていくものや、変わらない・変えられないものごと、時代の変化の中で豊かに生きることはどういうことかを考えた。

【講評（令和４年全国広報コンクール）】

多くの市民が関心をよせるテーマとオリジナリティのある表紙でインパクトがあった。タブロイド判の大きさを活かしたダイナミックなレイアウトで、ＤＸ＝デジタル化を分かりやすく特集している。表紙の「便利さは何のため」という問題提起が通奏低音となって各所に通じて響き、身近なデジタル化を一々掘り起こしながら、特集のまとめにある「人が豊かであるために」で受けとめられている。構成・展開が実に巧みである。

【　平塚市　広報企画 「平塚市の Instagram を高校生が乗っ取った！？」―自治体 SNS におけるインスタグラムテイクオーバーの活用―　】

【企画意図】
本市 Instagram 公式アカウント「hiratsukagood」を平塚学園高等学校の写真部（平塚市高浜台３１番１９号　大澤一仁校長）がテイクオーバーするイベントを実施しました。
本市のフォロワー層は、他市と比較して若い世代が極めて少ないことであったことに加え、令和３年度はコロナ禍により、例年開催していた写真展も中止する状態となっていました。
そこで人との接触につながらない SNS 内で完結する方法で、若い世代の関心を引くことができないか検討した結果、企業等なども採用している「インスタグラムテイクオーバー」という手法を使い、同写真部と連携して実施することになりました。同写真部の高校生が市内各所を巡り、「平塚で過ごす夏休み」をテーマに、高校生ならではの視点で本市の魅力を市公式アカウントで発信することで、若い世代のフォロワー数が実施前と比べ５倍以上増加するなど、一定数の若い世代が当企画や本市に関心を持つことに繋がりました。

【講評（令和４年全国広報コンクール）】
　現状分析、課題の分析をきちんと行い、行政ではまだ実施されていなかった新しい試み（インスタグラムテイクオーバー）で解決しようとする姿勢が良い。若年層の地域意識の弱さという課題を定量的に明確にしたうえで、インスタグラムテイクオーバーという現在の若者の興味を十分に勘案した解決手法が提起されている。コロナ禍の中での部活動の場を提供することになったのもよかった。

（企画メインビジュアル）